

第四章 変災

藩政時代の 変災

録・各地の『庄屋記録』などにより概要を抜粋する。

年月日	西暦	主要記事
慶長一四、	一六〇九	大雨・洪水
寛永八、八、六	一六三一	大風雨
寛文三、夏	一六六三	旱魃
〃 六、七、三、四	一六六六	大洪水
延宝元、五、一四、一五	一六七三	洪水・大風雨
〃 四、二、一八	一六七六	大風雨
〃 六、七、一〇	一六七八	暴風雨
元禄二、五、七	一六八八	大雨・洪水
〃 七、夏	一六九四	大旱魃
〃 一四、七、二八	一七〇一	夏旱魃・秋旱魃・兩藩の損毛二万石に上る
宝永四、八、一九	一七〇七	大風雨・洪水
享保一四、九、一一	一七二九	大雨・洪水

※ この享保一四年の災害について吉田藩では、幕府御用
番宛に概要を次のように報告している。

九月十一日午刻より雨降り、酉刻より雨募り、戌刻雷強
く、川々満水、堤切れ洪水にて、家中破損覚。川水常水に
一丈余増、陸地水高七尺、溺死者十人、(その他略) 続い
て九月十六日に詳報報告。

予州吉田当九月十一日、雷雨洪水の節、家中破損の儀大
概当月五日御届申上候。

右十一日、同十四日兩度、大雨洪水にて、田畑損毛、併
在浦破損之覚。

- 一、田四百八十五町 永荒共此高三千三十石
- 一、畑二百八十五町余□入流捨永荒当荒、此高五百十三石
- 一、井関二千七百二十一ヶ所
- 一、堤川除一万二千七百間余破損
- 一、潰家六百五十三軒
- 一、村浦道橋破損数多有之、悉難相糾御座候

伊豫吉田藩・災害損毛一覽表(藤曼延年譜による)

藩主	年号	西暦	原因	損毛石高		
				田(石)	畑(石)	計(石)
宗純	寛文六年	一六六六	洪水			七、三〇〇
村豊	享保一〇	一七二五	〃			六、七〇〇
〃	〃 一一	二六	〃			七、二〇〇
〃	〃 一二	二七	〃			三、九〇〇
〃	〃 一三	二八	〃			三、五〇〇
〃	〃 一四	二九	洪水	三、〇三〇	五、一三	三、五四三
〃	〃 一五	三〇	〃	三、〇〇〇	五、〇〇	三、五〇〇
〃	〃 一六	三一	〃	一、一六五	六、五三	一、八一八
〃	〃 一七	三二	虫付			二、五、二三
〃	〃 一八	三三	風雨			二、二八二
〃	〃 一九	三四	大雨	一、四八〇	六〇八	二、〇八八
〃	〃 二〇	三五	風雨	二、八五二	一、〇三五	三、八八七
〃	〃 二一	三六	洪水	(一八五町)	(二二六町)	
村信	元文二	三七	洪水			三、四八五
〃	寛延二	四九	地震			四、二八三
〃	〃	五〇	虫付			二、一五〇
〃	宝曆三	五一	風雨			四、二八三
〃	〃	五二	旱魃			四、二八三
〃	〃	五三	風雨			四、三二七
〃	〃	五四	洪水			三、八五二
〃	〃	五五	風雨			九、一五〇
〃	〃	五七	風雨			一〇、一八七
〃	〃	六二	〃			八五〇

村賢	明和	二	一七六五	風雨	四、〇九三	二、四七七	七、四六五
〃	〃	三	六六	旱魃	七、七五七	三六五	六、五七〇
〃	〃	四	六七	虫付	八、三三二	三七〇九	八、一二二
〃	〃	七	七〇	旱魃	三、二二三	一、四四三	一、九三一
〃	〃	八	七一	旱魃	二、四三九	四一九	四、六五六
〃	〃	二	七三	洪水	四、一五九	七〇九	二、八五八
〃	〃	七	七八	洪水	五、二四一	一、〇七七	一、三八五七
〃	〃	四	八二	風雨			一、三、一四
〃	〃	六	八六	洪水			一、四六三
〃	〃	七	八七	洪水			三、九三三
〃	〃	三	九一	洪水	三、六二四	二九九	一、六一八
〃	〃	八	九六	洪水			二、五〇二
〃	〃	一	九九	旱魃			一、八、七三
〃	〃	一	一八〇	洪水	四、〇一四	四八八	四、五〇二
〃	〃	三	〇二	〃	四、一六九	三八九	四、五五八
〃	〃	三	〇三	〃			二、一、二〇
〃	〃	三	〇四	〃	五、〇一九		二、〇、九〇七
〃	〃	六	〇六	虫付			五、〇一九
〃	〃	九	〇九	旱魃			五、三二七
〃	〃	一〇	一一	洪水	二、八三三	一七一	三、〇〇四
〃	〃	一三	一六	〃			一七、四四三

一、溺死、流死馬之儀者、先達御届申上候通御座候。

享保の飢饉とは実に長い期間に亘って、災害、凶作が続いていたようである。すなわち、享保七年七月に二度の暴風雨があり、宇和島・吉田両藩の損毛は三万石に近い。翌八年は全国的な大凶作。九年には夏大旱魃で両藩の損毛六万二百石、加えて十四年には前記のとおり損毛四万五千石、十五年も更に凶作で、同年の賑恤は一万二千三百人を数えた。こうして十六年も賑恤絶えず、十七年十八年に世に言う「享保の大飢饉」に突入するのだが、藩から幕府へ提出した報告には次のようになっていた。

当春以来、夏中雨降続、麦不作ニ御座候。其上運タノ雨天故、田作虫付、稲悉及損失候。(中略)稲作皆無之村浦数ヶ所有之候。損毛之高如何程ニ可有御座候哉、未相知不申候。

この為に飢饉に迫る者二万四千六百人、両藩共年中賑恤につとめ、吉田藩ではその費用三千両を幕府より借入れた。その後も風水害および旱魃等の変災は殆ど毎年のように起り、明和四年の風水害四万石、同六年夏の風水害二万

暴風雨は、三間地方に未曾有の災害をのこした。濁流は三間橋を越えるという大洪水となり三名の尊い犠牲者を出した。ここ三年続いて起る洪水に河川の被害は甚大であった。

また昭和二四年(一九四九)六月、豊後水道を襲ったデラ台風は、多数の人命を奪い、宇和海の漁業に壊滅的な打撃を与えた。其の他台風は年数回。定期便のように近辺を通過するが、三間町は四周の山並が防壁となつて、被害軽減に役立つていることは幸せと言わねばならない。

気象異変としては、昭和三八年(一九六三)三月から五月の間に七〇日にわたつて長雨が続き、麦や菜種の収穫に大打撃を与えたほか、雑穀類は生育不良で種子もとれぬ位の状態であった。またその年の冬豪雪があり、更に昭和四二年(一九六七)の夏大旱魃に見舞われ、農作物に被害が出た。

町内の大きな火災

町内の大きな火災を列挙すると次のとおりである。

○ 元文二年(一七三七)閏一月二八日、宮野下に大火があり、全町悉く焼失した。

○ 明和九年(一七七二)宮野下に大火があり、町内残らず焼失した。元文の大火を離れること三五年である。

三千石はその甚だしいもので、文政三年宇和島藩記録に、「昨二年の洪水のため破損した井川普請費津島御庄分二十五万人役」と記されていることから見ても当時の風水害の激しかったことがうかがわれる。

○ 天保六年九月一三日、藩より諸国とも不作で穀物が払底し米価が追々高くなるので、領内の穀物を他所へ売ることを堅く禁じる旨の触れが出された。

○ 弘化三年丙午暴風があり、後の人はこれを午年の大風と語り伝えた。

○ 安政元年大地震があり、震動数日に及び人びとは竹藪内に仮小屋を設けるなどして難に備えた。

以上のほか伊豫吉田藩における災害損毛一覽表は別表とおりである。

明治以降もまた殆ど毎年のように変災に襲われている。昭和九年(一九三四)の室戸台風、

昭和二〇年(一九四五)の枕崎台風、二二年のキャサリン台風等町内が被害を受けた変災は少なくない。特に昭和一八、一九年にかけては、台風による害を相次いで受けたが、中でも土居中・増田・元宗に被害が多かった。翌二〇年九月一七日から一八日の枕崎台風による

○ 天明五年(一七八五)正月、宮野下又火を失して町の大半が焼失した。

○ 天保五年(一八三四)一月二日、宮野下町出火、折からの強風に煽られ、町・村合わせて八〇戸を焼失した。隣村よりは粥の炊き出しに当たり、跡片付けの人手を送る。役人は小屋掛け用の木・竹・縄・藁等を三間内に割り付けて差し出させ、仮小屋を建てると共に、人手のない家では人夫に命じてこれを建造させた。罹災者には、男女人別に応じて救援米を与え、家屋建築の資金を貸与した。

元文・明和・天明・天保と九七七年間に四度も大火に見舞われた宮野下の住民の困惑は、実に甚だしいものがあつたであろうし、貴重な物件の焼失も惜しまれる。口碑によると、当夜の火災は町の下手に起こり、次第に上手に延焼し、上酒屋の桑名屋の隣で消火した。桑名屋では焼跡修理の際、壁から小さな仏像が出たので、この仏像の利益により類焼を免れたとし、その後永くこれを尊崇したといわれる。なおこのときの大火で、波岡村正太夫が、米屋甚左衛門夫婦の危難を救ったとのことで、その筋より鳥目(銭)二百文を賞与せられたという。